

一般社団法人

日本女性科学者の会 NEWS

The Society of Japanese Women Scientists



No.124 2019.3

I. 2019年新春に寄せて

2019年の年頭に当たり、会員の皆様にはつつがなく新年をお迎えになられたことをお慶び申し上げます。昨年2018年は、本会が設立されました1958年から数えて60年目となる節目の年に当たりました。これを記念し、60周年記念講演会の開催に加え、本会の活動記録をまとめました「この10年の歩み」、さらに本会会員のロールモデル集を作成致しました。会員の皆様には多大なご協力を頂き、無事企画した出版や講演会等を開催することができました。記念講演会の詳細報告につきましては、5～6頁をご参照ください。

さてこの2019年は、本会が誕生から60年という還暦を迎え、新たな1年目を踏み出す年に当たります。新たなスタートに当たり、本会活動の在り方等について、全会員の皆様に参加頂く議論が必要です。その第一歩として、昨年末から会員一斉メールをお願いを致しておりましたアンケート調査の結果を、紙面の都合でごく一部ですが本号に掲載致しました（7頁参照）。詳細分析につきましては後日、本会ホームページに掲載する予定です。会員の皆様には、ぜひ忌憚なきご意見をお寄せ頂きたいと願っております。

60年前本会は「女性科学者の友好を深め、各研究分野の知識交流を図り、女性科学者の地位向上を目指すとともに、世界の平和に貢献すること」を設立趣旨として、

目次

I. 2019年新春に寄せて	1
II. 2019年新春懇談会	2
III. 第12回学術大会	4
IV. 60周年記念事業	5
V. 60周年記念講演会	6
VI. 60周年記念事業アンケート報告	7
VII. 60周年記念講演会&新春シンポジウム風景	8

一般社団法人 日本女性科学者の会 会長 功刀 由紀子

産声をあげました。このうち女性研究者の地位向上を目指す活動に関しては、本会にとり通奏低音とも言うべき基盤活動であり、具体的には現状での地位向上を目指すと共に、次世代の地位向上を目的とした現状の活動継承と、次世代の更なる発展の糸口を模索することが、本会の使命と考えております。

ここで本会が目指すべき次世代への継承としてSTEM (Science, Technology, Engineering and Mathematics) 教育に注目してみましょ。その必要性が世界的に叫ばれているSTEM教育に関して、わが国でもようやく今回の学習指導要領改訂に盛り込まれることにはなりました。しかしながら、「理数教育の充実」なる名目で、将来、学術研究を通じた知の創出をもたらしことができる創造性豊かな人材の育成を目指し、新たな教科として共通教育の位置付けで「理数」を設け、その中に探求的科目として「理数探求基礎」及び「理数探求」を新設しています。ノーベル賞でも意図しているのか、未来の研究者育成とのことですが、文部科学省のホームページを参照しても、抽象的な表記ばかりで明確な内容が伝わってきません。にもかかわらず教育現場では、これまで蓄積された魅力的で教育効果の高い教材が、無視される様相が垣間見えているようです。

一方、2016年4月から施行された女性活躍推進法により、大学も含めた多くの事業所においては、女性研究者にとって活躍の場が増え、環境改善が一步進んだと評価すべきでしょう。しかしながら、この状況を単なる数値合わせに終わらせないことが今後の重要な課題と考えられます。

本会の設立趣旨であり活動使命でもある女性研究者の地位向上や研究環境改善に関し、本会が国や行政に対して様々な提言を積極的に発信することは必要かつ社会的使命であり、継続して行うことに意義があります。会員の皆様には、ぜひ議論の場に参加くださいますよう、何卒お願い申し上げます。

2019年新春懇談会（シンポジウム）報告

北海道・東北ブロック理事 梅津理恵、小川美香子、本間美和子

2019年新春懇談会が1月12日(土)北海道・東北ブロックの担当で、仙台市シルバーセンター（仙台市青葉区花京院）6階の第2研修室にて開催されました。仙台での開催は3年ぶりでした。当日は、幸いにも気温がさほど低くなく、穏やかな天気の中、各地より全部で16名の方にご参集いただきました。功刀会長の開会の挨拶より始まり、今回は3名の講師からご講演頂き、その後、意見交換会として茶話会を開催しました。

プログラム

<司会：梅津 理恵理事>

13：00 開催挨拶 功刀 由紀子 会長

13：05 益見 厚子先生 青森大学薬学部 教授

「インターフェロン制御因子 IRF-2 の生物学的機能について」

<座長：本間 美和子理事>

13：50 有働 恵子先生 東北大学 災害科学国際研究所 准教授

「消えゆく砂浜～砂浜の未来について考える～」

<座長：宮本 霧子理事>

14：35 藤村 維子先生 東北大学 男女共同参画推進センター（TUMUG）特任講師

「東北大学男女共同参画推進センターの取組

～女性研究者のさらなる活躍とダイバーシティ研究環境の実現を目指して～」

<座長：石川 稚佳子理事>

15：20 閉会挨拶 小川 美香子 北海道・東北ブロック長

15：25 意見交換会

「インターフェロン制御因子 IRF-2 の生物学的機能について」

青森大学・薬学部・教授 益見 厚子先生

先生は富山市のご出身で、富山中部高校を卒業後、富山医科薬科大学・薬学部に進学され、東京医科歯科大学大学院・医学研究科博士後期課程を修了後、1990年より国立感染症研究所・血液安全性研究部に勤務され、2015年より青森大学・薬学部の教授の職に就かれています。ご専門は生化学、および薬理学。当日の講演では、アメリカNIH(NICHHD)で2年間携わった研究テーマをきっかけに前職の国立感染症研究所で進めてきた研究内容について紹介されました。



<講演要旨>

抗ウイルス薬、及び抗癌剤として用いられているインターフェロン(IFN)で発現レベルが制御される因子のうち転写因子IRF(IRFファミリー)は、免疫系だけでなく、細胞の分化増殖状態においてもその発現が調節されています。インターフェロン系における負の制御因子として知られてきたIRF-2が細胞核内の共役転写因子と結合し、特定の遺伝子の転写活性を促進することを証明することができました。また、IRF-2が造血幹細胞に高く発現していることを見いだしたことから、IRF-2の造血幹細胞に及ぼす影響を検討し、IRF-2が炎症状態においてマウスの骨髄細胞由来の造血幹細胞／前駆細胞を巨核球、血小板の分化誘導に関わっていることも証明しました。骨髄幹細胞移植キメリズム解析よりIRF-2^{-/-}マウス骨髄細胞において造血幹細胞(HSC)がほとんど消滅していることが見出され、さらに、IRF-2と結合する造血に重要な因子を見出したので、検討を重ねているところです。

「消えゆく砂浜 ～砂浜の未来について考える～」

東北大学・災害科学国際研究所・准教授 有働 恵子先生

先生は熊本県のご出身で、熊本高校を卒業後、筑波大学第3学群基礎工学類(構造工学専攻)に進学し、筑波大学大学院工学研究科で博士課程を修了後、2003年より(独法)港湾空港技術研究所にて研究官、2006年に東北大学大学院工学研究科の助教に就かれ、2012年に准教授に昇任されました。ご専門は海岸工学、災害科学。当日は、沿岸災害や砂浜減少などの問題に関してご講演頂きました。



<講演要旨>

日本の多くの砂浜は、戦後の日本の高度経済成長期における急速な国土保全・国土開発や、高波・津波などの自然災害の影響で侵食され続けています。砂浜が消失する過程で防災対策は格段に進み、自然災害による被害は減少してきましたが、近年は、この砂浜の消失によって環境や利用における機能が損なわれるだけでなく、堤防を安定に保つ防災機能が損なわれるなどの問題が顕在化しています。将来は、気候変動による豪雨の増加、台風の巨大化に伴う高潮・波浪災害の増加、ならびに海面上昇の砂浜への影響が予測されています。海岸管理には莫大な費用がかかるため、現状においても砂浜を十分には維持できていない状況にあり、今後はさらに費用対効果を考えた対策を行っていく必要があります。この費用対効果を検討する際には一般に費用便益分析が用いられていますが、この便益の算定にも様々な課題があります。この問題と、私たちがどう向き合っていこうとしているのか、現状についての話題を提供します。

「東北大学男女共同参画推進センターの取組

～女性研究者のさらなる活躍とダイバーシティ研究環境の実現を目指して～

東北大学・男女共同参画推進センター (TUMUG) 特任講師 藤村 維子先生

先生は宮城県のご出身で、宮城県第一女子高校を卒業後、東北大学理学部化学系化学第二学科に進学し、東北大学大学院理学研究科で修士課程を修了されました。その後、理化学研究所フォトダイナミクス研究センター、スタンフォード大学医学部 脳神経外科学分野での勤務を経て、2000年に東北大学大学院理学研究科化学専攻で博士(理学)号を取得し、東北大学加齢医学研究所にて博士研究員や技術職員、日本学術振興会 特別研究員 RPDの職に就き、2012年より東北大学学際科学フロンティア研究所 助教/URA (University Research Administrator)、2016年より東北大学 男女共同参画推進センター・特任講師/URAの職に就かれています。



<講演要旨>

東北大学の「杜の都女性研究者エンパワーメント推進事業(H28～H33)」(以下、エンパワーメント事業)が平成28年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)の採択を受けました。これを機に東北大学では優れた研究成果の創出に繋げるために、学内の研究環境のダイバーシティを高め、女性研究者のライフイベントとワーク・ライフ・バランスに配慮した研究環境の整備、研究力向上のための取組、および女性研究者の採用及び上位職への積極的登用に向けた取組を展開しています。

東北大学ではこれまで両立支援・環境整備、女性リーダー育成、および次世代育成の取組として各種支援制度を実施してきましたが、エンパワーメント事業により、科研費フォローアップ研究費など、4つの支援制度が新たに加わりました。またエンパワーメント事業目標の実現に向けて、女性研究者の採用及び上位職への積極的登用に向けた「女性教員採用促進事業」を開始しました。この度新設された優秀女性研究者賞「紫千代菫(むらさきせんはいはぎ)賞」、学内アンケート調査結果など、近年の取組と成果、今後の方向性についてご紹介します。

第12回日本女性科学者の会学術大会

2018年11月3日（土）13時から、第12回日本女性科学者の会学術大会が昭和女子大学コスモスホールで開催された。学術大会終了後、60周年記念講演会が引き続き開催されたため本年はポスター発表のみの開催となった。ポスター演題、研究発表20題、男女共同参画学協会連絡会における活動報告2枚、奨励賞受賞者の活躍と奨励賞募集2枚の22題であった。



担当の関東ブロック長である中山理事より、開会の挨拶と本日の予定の説明、功刀会長からの開会挨拶があった。野呂知加子理事の司会により、各演者によって要旨のパワーポイント投影の元、口頭で概略発表（1分）がなされた。その後、オーロラホール出入り口エレベーターホールにてポスターセッションを行ない活発な議論がなされた。ホールに準備したコーヒーなどを楽しみながら、有意義な討論ができたものと思われる。なお、本会の性格上、ポスター発表には新たな知見の報告だけでなく、活動紹介的なものが含まれていることを申し添えておく。ポスタータイトルと発表者を以下に記した。

（関東ブロック長 中山 榮子 昭和女子大学）

<医学薬学>

- P1 精子を作る幹細胞とその操作技術
篠原 美都（京都大 医）
- P2 急性期医療への東西医学融合を目指した研究
～“Scheduled Injury”に対する未病治療の開発～
出野 智史（慶應大 医）
- P3 構造ゆらぎ抑制標的結合ペプチドを組み込んだ小型
HRE2結合分子の機能評価
太田 優美（東工大 生命）
- P4 地域食品成分の生活習慣病予防効果に対する評価研究
益見 厚子（青森大 薬）
- P5 プロリン異性化酵素によるがん細胞の増殖制御機構
島田 緑（山口大 獣医）
- P6 iPS細胞由来膵臓β細胞の機能向上研究
岳 千植（東工大 生命）
- P7 脱分化脂肪幹細胞からの骨格筋誘導
山崎 春香（日大 生産工学）
- P8 皮膚創傷治癒におけるSTINGリガンドの役割
服部 有希（岐阜大 医）

<化学>

- P9 ホウ素中性子捕捉療法のための細胞膜透過性ホウ素
クラスターの開発
永澤 秀子（岐阜薬大）
- P10 グラミシジンA類縁体のライブラリー構築とスク
リーニング法開発
高田 悠里（東大院 薬）
- P11 紫外10フェムト秒レーザー光を用いたドナーアクセ
プター分子の電荷移動機構解析
高木 里伽子（神奈川大 工）
- P12 細胞の形態変化を指標とした海洋天然物の探索
周防 玲（東大院 農）

<生物>

- P13 休眠がん細胞に細胞死を誘導できる薬剤の作用機序
解析

- 遠藤 みのり（東工大 生命理工）
- P14 CDRペプチドを利用した抗体代替分子の創製プラッ
トフォームの構築
勝見 茉莉奈（東工大 生命理工）
- P15 ヤマトヒメミズ再編再生の数理モデル：体節形成
の新モデルとその分子メカニズム
野呂 知加子（日大 生産工学）

<栄養>

- P16 若年女性の体組成の実態
藤本 芽久美（昭和女子大 院）

<農学>

- P17 廃樹皮の有効活用～樹皮抽出液から木材保護剤へ～
中山 榮子（昭和女子大 院）

<科学教育>

- P18 祝110周年 キュリー夫人から学ぶ科学教育
吉祥 瑞枝（東京理科大）
- P19 $E = mc^2$ に基づくエネルギー基礎教育の研究と実践
荒谷 美智（六文協）

<物理>

- P20 金属材料を透過する水素の可視化ーオペランド水素
顕微鏡の開発ー
板倉 明子（物質・材料研究機構）

<SJWS>

- P21 女性研究者の採用促進に関する他国の政策と効果の
調査：男女共同参画学協会連絡会WG活動報告2018
- P22 一般社団法人日本女性科学者の会について



一般社団法人日本女性科学者の会・創立60周年記念事業の報告

2018年11月3日（土、祝）東京都世田谷区にある昭和女子大学において、創立60周年記念事業の一つとして記念講演会および懇親会を行った。本会らしいアットホームな雰囲気、実施することができた。ご参加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

当日のプログラムは以下のとおりである。記念講演の詳細については座長を務めた理事からの報告を参照していただきたい。



一般社団法人 日本女性科学者の会
創立60周年記念講演会
-「すべての女性が輝く社会」に活きる-
2018年11月3日(祝) 於 昭和女子大学

Ⅱ プログラム Ⅱ

13時：一般社団法人日本女性科学者の会 (SJWS) 第12回学術大会

15時：記念講演会

司会 中山 榮子
(SJWS理事、60周年記念事業委員長、昭和女子大学 教授)

◆ 来賓挨拶
坂東 真理子氏
(昭和女子大学 理事長・総長、初代(初)内閣府 男女共同参画局長)
池永 肇恵氏
(内閣府 男女共同参画局長)

◆ 講演1「網膜再生治療開発物語」
高橋政代氏
(理化学研究所 多細胞システム取組研究センター(COIS) 網膜再生医療研究プロジェクトリーダー)
座長：近藤 科江 (SJWS理事、東京工科大学 教授)

◆ 講演2「Equal OpportunityからEqual Outcomeの実現へ向けて」
Machi Dilworth氏
(沖縄科学技術大学院大学(OIST) 男女共同参画・人権担当副学長)
座長：本間 美和子 (SJWS理事、福岡県立医科大学 准教授)

17時：懇親会

◆ 来賓挨拶
清水 明氏
(文部科学省 総合教育政策局長)

記念講演会プログラム

日時：2018年11月3日(土)15時

場所：昭和女子大学オーロラホール(司会：中山理事)

1. 開会の挨拶：中山 榮子
(創立60周年記念事業委員会委員長)
2. 会長挨拶：功刀 由紀子会長
3. 来賓挨拶：坂東 真理子氏
(初代内閣府男女共同参画局長、昭和女子大学理事長・総長)
4. 来賓挨拶：池永 肇恵氏
(現内閣府男女共同参画局長)
5. 記念講演：高橋 政代氏
(理化学研究所 生命機能科学研究センター 網膜再生医療研究開発プロジェクト プロジェクトリーダー)
「網膜再生治療開発物語」
(座長：近藤 科江理事)
6. お知らせ：本年度の奨励賞募集について
(近藤理事)
7. 記念講演：Machi Dilworth氏
(沖縄科学技術大学院大学 男女共同参画・人事担当副学長)
「Equal OpportunityからEqual Outcomeの実現へ向けて」
(座長：本間 美和子理事)
8. 記念撮影
(会場移動およびポスター撤収のご案内)

懇親会

日時：2018年11月3日(土)17時

場所：昭和女子大学ソフィア (司会：中山理事)

1. 会長挨拶：功刀 由紀子会長
2. 祝辞：清水明氏(文部科学省総合教育政策局長)
3. 乾杯：大倉 多美子氏
(日本女性科学者の会第7代会長)
4. 懇談
5. 閉会の挨拶：大島 範子氏
(日本女性科学者の会第6代会長)

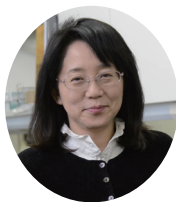
記念講演会以外の60周年記念事業として、記念誌とロールモデル集を発行した。創立60周年記念誌「この10年の歩み」には、創立50周年記念誌以降の本会の活動をまとめた。第5, 6, 7代会長よりのメッセージ、奨励賞の実績、記念講演会プログラムと要旨、この10年の活動記録などがコンテンツである。SJWSロールモデル集は「日本の女性科学者たち2018」～その歩みと大切にしたいもの～と題し、本会HPなどで募集した原稿をまとめたものである。45人の女性科学者からのメッセージを綴った。今後女子中高生向けのイベントなどでも役立てたいと考えている。

このほか、この記念事業に関して、多くの寄付をいただいた。会長から報告・御礼があるが、本稿の最後に実行委員会からも御礼を申し上げたい。(創立60周年記念事業委員会委員長、中山 榮子、昭和女子大学)

「網膜再生治療開発物語」

高橋 政代氏

理化学研究所 生命機能科学研究センター
網膜再生医療研究開発プロジェクト
プロジェクトリーダー



高橋先生講演についてのご紹介

記念講演会担当理事 近藤 科江(東京工業大学)

高橋氏は、世界で初めてES細胞から神経網膜を分化誘導することに成功し、2014年にはイギリスのネイチャー誌が選ぶ「2014年に注目すべき5人」に選出、更に同年9月12日には自己由来のiPS細胞を患者へ移植する臨床研究を世界で初めて実施し、ネイチャー誌「今年の10人」にも選出されました。現在、臨床研究を続けながら、公益社団法人「ネクストビジョン」の理事を務めるなどして、「アイシー」運動など、視覚障害者の就労支援活動も進められています。

ご講演では、現在取り組んでいる臨床研究に至る経緯をお話頂きました。研究の始まりは、1995年ソーク研究所の研究員の時で、当時発見されたばかりの神経幹細胞から神経網膜もできるのではないかと思い、体性幹細胞で実験を重ねたがうまく行かず、2000年頃にES細胞に着目し、神経網膜に分化誘導することに成功しました。2012年にノーベル賞を受賞された山中伸也先生がiPS細胞を開発すると、iPS細胞由来網膜色素上皮細胞の樹立に成功し、移植による加齢黄斑変性治療研究を開始、2013年6月に臨床研究の実施が承認され、2014年9月に世界初のiPS細胞による再生治療を実施しました。

2子の母親でもある高橋氏とは、京都大学「風の子保育園」で保護者として交流があり、保護者会やOB会で一緒に楽しく子育て談義をした思い出があります。その時と変わらない気さくな笑顔で、ご講演頂きましたが、「世界初」のチャレンジは、想像を絶する苦労や苦難の連続であり、現在もまだ、そのチャレンジの最中であることを力強く語る姿には、感動すら覚えました。会場には、「多くの困難を乗り越えて現在がある」という女性研究者も多くおり、そのような方々には心の拠り所を、これから研究に取り組もう、もっと推進していこうとしている若い研究者の方々には、勇気をそして、一つの目標、道標を示して下さいました。本会60周年記念に相応しい素晴らしい講演でした。

「Equal OpportunityからEqual Outcomeの実現へ向けて」

Machi Dilworth氏

沖縄科学技術大学院大学 男女共同参画
人事担当副学長



Machi先生講演についてのご紹介

記念講演会担当理事 本間 美和子(福島県立大学)

Machi Dilworth先生は米国NSF高官として長く務められ、広く世界の科学分野を俯瞰するお立場から日本の男女共同参画推進へも多大な貢献をなされた。特に良質な施策の重要性、政策側のみならず各機関における環境整備と、人々の高い意識を目覚めさせた立役者とも言える。EPIMEWS発行の「無意識のバイアス」リーフレットにも尽力された。男女共同参画の基本理念「自らの意思によって社会活動へ参画する機会が確保され、均等に政治、社会、文化等への利益を享受し共に責任を担う社会を形成すること」は国の発展のため重要な事は言うまでもない。日本の実態へ目を向ければ、初中等教育に於ける科学分野学習到達度に男女差は認められないにもかかわらず理系選択比率には大きな男女差があり、学部/大学院/教育研究職へと上る程女性比率は下がっていく。論文被引用数等から見た学術的価値にも男女差は無いが、理系研究者の国際比較やGGI指数等も世界最下位レベルの現実がある。今のペースでは2060年まで待たなければ30%へ到達できない。

これら我が国の実態を真に理解すれば、日本に潜在する課題として施策の不足に加え、女性リーダーやロールモデルが少ないこと、私たちの心の内にある無意識のバイアス等が見えてくる。次はそれをいかに解決すべきか、諸外国の施策等の好例、EUのHorizon 2020や米国NSF Advance等、も参考に環境を整備すればよい。例えば評価委員の女性比率を規定する、無意識のバイアスについての研修を審査前に受けさせる、研究応募チームの男女バランスも評価に反映させる、意識を高める研修に参加する費用も計上させる、等の工夫には学ぶところが多い。世界は今「機会均等」を整備する時代から「結果均等」の方向へと舵取りをしている。女性研究者自身の心得としても、後進のロールモデルやメンターとしての役割を担い積極的に支援する意識を持って努力することは可能なはずである。

ご講演を聞いて、あらためて男女共同参画の推進には世界的な視座を持って協調的に歩もうとする高い意識が求められると認識した。自律的な意識改革への努力を含め、今後のSJWS活動に於いてもヒントとなる多くの学びと気づきがあった。全国から参加者を得て盛会となり、Machi先生へ心から御礼を申し上げます。

60周年記念事業会員アンケートについて

総務担当理事 浜田 恵美子

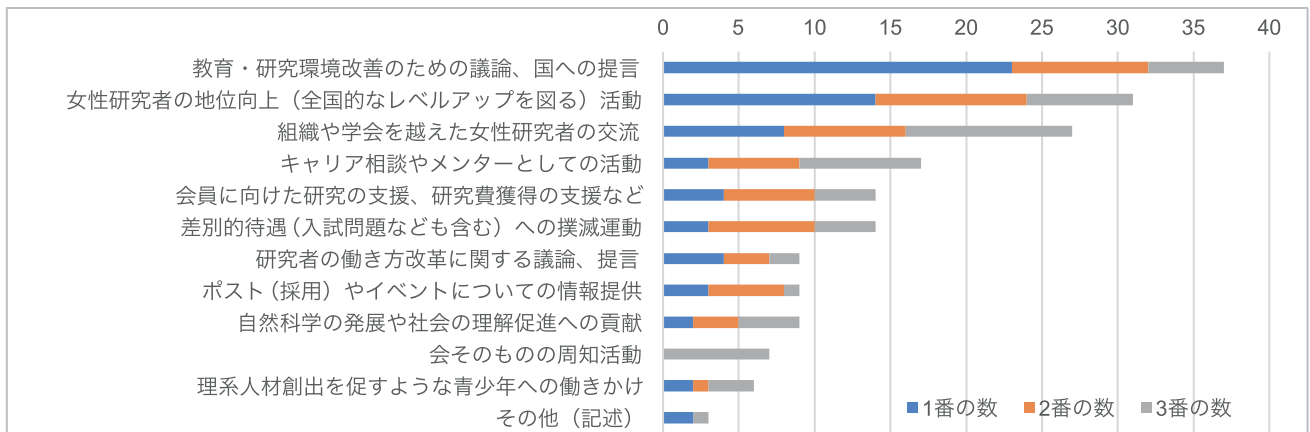
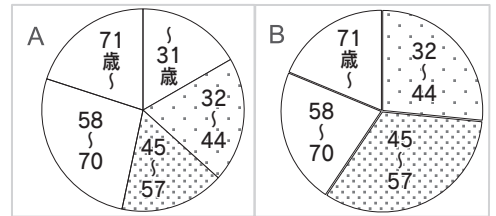
60周年を機会に、日本女性科学者の会の今後の進め方について、会員の意向を調査した。

まず、11月3日の記念行事参加者に紙でアンケート（A）を行い、30名の回答を得た。その結果を参考に、会員全体に向け、Webアンケート（B）を12月25日から1月31日まで実施し、64名の回答（会員総数の21.5%）を得た。これらの結果の概要を報告する。詳細は、会員向けホームページで後日公開する予定である。

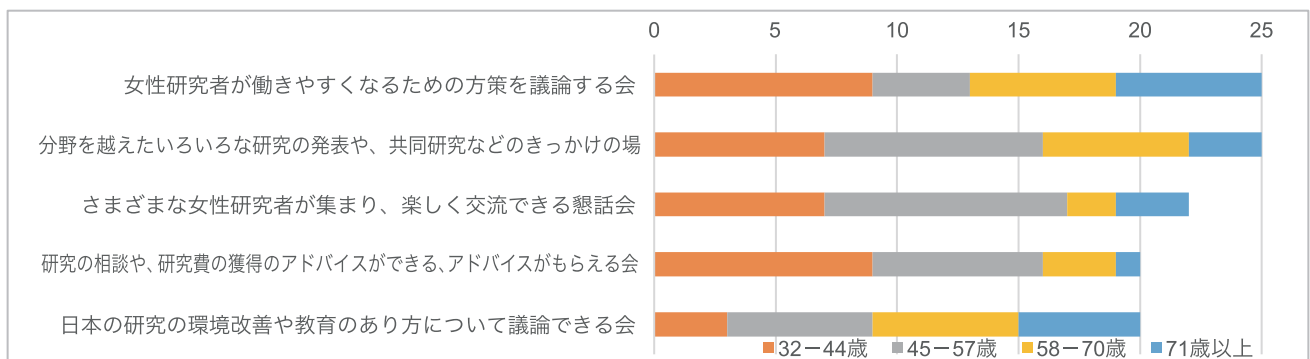
【年齢層】 Aのイベント参加者は、学生アルバイトの方や若い研究発表者が参加されたため、比較的若い年齢層が多い。Bは中堅層の比率が高くなっており、会の実態に近いと推定される。

【所属・分野】 いずれのアンケートの結果も同様で、大学関係者の比率が高く（70%以上）、所属間の比較は難しい。分野は、医および薬と理工がほぼ拮抗する人数の分布である。これについては、課題認識等の分析において比較予定である。

【会が取り組むべきことは何でしょうか？】 Bアンケートの結果を下記に示す。回答は選択肢の中から、上位から1番、2番、3番というように選択したものである。



【あなたの参加したい活動は何でしょうか？】 Aのアンケートを予備調査として、Bでは具体的な選択肢を設けてアンケートを行った。上位5項目は、下記のとおりとなった。今後の活動の中に取り込んでいきたい。



【地域とブロック活動】 現在、会では全国を5つのブロックに分けて活動しているが、実際に参加しやすい都市との関連を調査した。中部地方以東は、東京か、もしくは近辺の都市（札幌、仙台、名古屋）、関西以西は東京でも難しいという結果であった。地域の活動のあり方を議論する必要がある。

【アンケート後記】 アンケートの中には、個別に文章で記載いただいたものもあり、中には「活動の内容が見えない」や「理事会の運営の在り方がどうか」などのご意見もあり、理事会の中で議論していきたい。また、限られた紙面には掲載できない項目などは、後日ホームページにて公開したい。アンケート結果は設問の適切さにも依存するため、今後とも会員からの直接の声を入れることが欠かせないと考える。ぜひ事務局あてにお知らせいただきたい。



新春シンポジウム



事務局からのお知らせ

「一般社団法人日本女性科学者の会 第6回総会および第23回奨励賞・功労賞贈呈式」が
2019年5月26日(日) 学士会館で開催されます。
多くの会員の皆様に参加されますように、よろしくお願い申し上げます。

編集：玉井 幸恵・山口 陽子・小川美香子・小杉 尚子・廣瀬 理沙
発行所：一般社団法人 日本女性科学者の会 ©
事務局：〒453-8777 名古屋市中村区平池町4丁目60-6 愛知大学 名古屋一般教育研究室内
TEL：052-564-6151 FAX：052-564-6251 E-mail：sjws-office@sjws.info